

「○を描いたところで泊まり、線を描いたところ で昼の休憩をとる」という表現について

～モンゴル英雄叙事詩における馬の隠喩仮説に基づく解釈～

About the expressions 'Stay at the Place Marked with Circles, Take a Break at the Place Marked with Lines': Exploring the Underlying Meaning of a Mysterious Expression through a Hypothesis of the Metaphor of the Horse in Mongolian Heroic Epics

藤井 真湖

Mako Fujii

Abstract

The expressions mentioned above often appear at the end of Mongolian epics where the hero gets a wife after fighting against his rivals or enemies. Even though it is literally understandable, what this expression really means is unclear. It seems that some custom in Mongolia is reflected, but in reality there are no customs related to it in the past or present. In other words, this expression is a mysterious phrase. In fact, however, this phrase has implicit meaning. In order to understand this mysterious phrase, it is necessary to assume the following two things.

- 1) A horse is not just an animal but implicitly the mistress of the hero.
- 2) The figures such as ○ and lines show the shape of the footprints of a horse, and the shape symbolizes the feelings of the horse.

Upon accepting these two assumptions, the expression in question could be understood very well, so this premise is considered to be reasonable. However, there are some variants in the expression. The shape sometimes becomes □ or △, or other. These variants can be thought to be a transfiguration of the prototype.

As the metaphor decreases, the expression changes due to the interest in graphical comparisons within the phrase, the pleasure of the sound, or the influence of popular sayings. In particular, the riddle "daytime triangle, nighttime square" popular among Mongolians is the main phrase that influenced the change in expression.

はじめに―本論の概要―（注1）

モンゴル英雄叙事詩における結末部分には“○を描いたところで泊まり、線を描いたところで昼の休憩をとる”という表現がしばしば現れる。字義的には理解できても、この表現が何を意味しているのかはあまりよくわからない。モンゴルにおける何らかの慣習が反映されているようにも見えるが、実際に、これに関連するような慣習は過去にも現在にも存在していない。つまり、この表現は謎のフレーズになっているといえる。しかし、実はこのフレーズには非明示的な深い意味がある。この謎のフレーズを理解するためには、次の2つの仮説を前提にする必要がある。

- ① 馬は非明示的には動物ではなく、主人公の非正妻を意味していること。
- ② ここで言及されている○や線といった図形が馬の足跡の形を示したものであり、その形は馬の心情を表わした表現であること。

この2つの前提を受け入れると、当該表現は非常によく理解されるので、この前提は妥当なものと考えられる。ただし、当該表現にはヴァリエントが幾つかあり、描かれている形が○や線ではなく、□や△その他がある。しかし、○や線であれば意味ある表現として理解できるが、□や△では当該表現を意味あるものと理解できない。それゆえ、それらは隠喩が衰退したために変化したものと考えられる。

隠喩が衰退すると表現に変化が生じ、具体的に言えば、対句における図形的な対比の面白さや、頭韻による音的な面白さ、あるいは、外見の形式だけ類似している定型的な言い回しの影響により変化が生じている。とくに、最後の外見の形式だけ類似している定型的な言い回しであるなどなぞ“昼は△、夜は□”は、当該表現の変化に少なからずの影響を及ぼしたといえる。

1. 本論の目的および馬＝恋人の仮説

1. 1. 本論の目的

本論の目的は、表題にある“○を描いたところで泊まり、線を描いたところで昼の休憩をとる”という表現の非明示的な意味を探ることである。当該表現はモンゴル英雄叙事詩の結末部においてしばしば現れるものである。主人公は冒険の最終段階で故郷に向かうが、その帰途において、当該表現のように“○を描いたところで泊まり、線を描いたところで昼の休憩をとる”ように命じる。この表現は主人公の従者たちに向けられたものであると一般に解釈されているように思われるが、実際のところ、誰に対してなされている命令かは明確に書かれておらず、この表現が何を意図しているのかも不明と言わざるをえない。

しかし、もし次のような2つの前提を受け入れれば、当該表現はかなり奥深い内容をもつフレーズだということが理解されることになる。その2つの前提とは次のものである。

- ① 馬は非明示的には動物ではなく、主人公の非正妻を意味していること。
- ② ○や線といった図形が馬の足跡の形を示したものであり、その形は馬の心情を表わした表現であること。

この2つの前提を受け入れれば、この表現が意味あるものとして立ち現われてくる。本論では、この前提を受け入れて、当該表現の深い意味を提示することを第1の目的とする。

ただし、当該表現にはヴァリエントがあるが、それらヴァリエントでは、1つの例外を除いて、当該表現の非明示的意味を引き出すことはできない。具体的に言うと、描かれている形には○や線ではなく、□や△その他がある。しかし、○や線であれば意味ある表現として理解できるが、□や△では当該表現を意味あるものと理解できない。それゆえ、当該表現が複数存在するヴァリエントの中のプロトタイプに近いものであることを指摘する。そのうえで、他のヴァリエントを当該表現からどのように変化したのかを考察することを第2の目的とする。具体的には、プロトタイプと近い事例を他のヴァリエントと一つずつ比較しながら、どのように関連しているのかを示す。

第3の目的は、隠喩が衰退すると表層的な形式の変化が起こることを示すことである。具体的には、当該表現の変化に大きな影響を与えたと見込まれる、“夜は□、昼は△”という謎々の表現を取り上げる。

1. 2. 議論の流れ

議論の手始めとして、まず続く1. 3. においては、馬が恋人（非正妻）の隠喩であるという仮説を述べる。そのうえで、当該表現に現れている○や線の図形を、馬の蹄の足跡で、ひいては馬（非正妻の恋人）の微妙な心情を表わしているという仮説を述べる。すなわち、最初に提示した当該表現が“プロトタイプ的な表現”だということを示す。そして、ここでは、この2つの前提を受け入れて当該表現を読めば、非常に深い非明示的内容が読みとれることを詳細に示すことにする。

つづく1. 4. においては、当該表現のヴァリエントとして筆者の手元にある事例Aから事例Fの6例を示しながら、ヴァリエントの形式は大きく主人公の命令形として現れるものと、説明文として現れるものの2つに分かれていることを示す。そして、どちらも原型となりうることを示す。ただし、前者の事例が多いことを重視して、本論ではヴァリエントに多く表れる主人公の命令形を仮の原型とみなすことにし、このプロトタイプ的表現を「仮の原型」と簡便に表わすことにする。

2. では、こうした「仮の原型」との関係で、他のヴァリエントはどう説明できるかという観点から考察をおこなう。当該節においては、これらのヴァリエントがプロトタイプ的表現からどのように離れていったかを考察する。

さらに、3. においては、当該表現のヴァリエントには、“昼は△、夜は□”という謎々の言

い回しの影響を受けた可能性を指摘し、3. 1. においては、謎々riddle の影響という観点からヴァリエントを整理する。これを踏まえてさらに3. 2. においては、ヴァリエントの生成には謎々の影響のあるものとそうでないものがあることを指摘し、「仮の原型」においては謎々の影響は皆無であることを明らかにする。

4. においては、本論のまとめを行うとともに、当該表現のプロトタイプが、ジャンガル英雄叙事詩の一つの章『ブフ・ムンゲン・シグシルゲ』―プレヴ氏の語ったとされている―に現れていることの意味を考察する。

1. 3. 本論における馬の隠喩と馬の足跡という2つの前提

馬頭琴伝説を構造分析することによって、馬 (морь) が正妻と対比的に表される“恋人”や“愛人”といった非正妻ではないかという考察を筆者は以前におこなったことがある (藤井 1998) (注2)。その後、この考察をさらに展開してモンゴル英雄叙事詩における馬の隠喩についての考察を重ねてきた (藤井 2001,2002,2003,2005,2006)。本論でもこれらの考察の延長で、馬が非正妻の隠喩ではないかという仮説を採ることにしたい。

さらに、本論では、当該表現で現れる図形の形を馬の足跡と解釈し、これを馬の心情を表わしているものと解釈するという仮説を採ることにしたい。

これら2つの仮説を取り入れれば非明示的意味がうまく読み解ける事例として、当該表現にはヴァリエントが幾つか存在するものの、当該表現のプロトタイプ的な表現は、ジャンガル叙事詩群のひとつである新疆のプルウ氏の語った『ブフ・ムンゲン・シグシルゲの婚姻譚』において出現している表現といえる (Эх материал 2 出版年不明:303)。それゆえ、まずこれを事例Aとして挙げておきたい。ただし、事例はキリル文字で転写しておく。

事例A

Төгрөг зурсан газарт хоноод ирээт ○を描いたところに宿泊して来なさい。

Ут зурсан газарт үдлээд ирээт 線を描いたところでお昼を過ごして来なさい。

一見すると、この表現において現れる○や線を描いたのは、主人公であるように思われる。実際、後述するように、当該表現のヴァリエントの中には、「主人公が描いた」としているものもみられる。しかし、本論では、「○や線が描かれたところ」という表現を、馬の蹄の跡と理解することにしたい。そして、この蹄の跡というのは、馬 (非正妻の恋人) の心情を細やかに表した表現であると見なすことにする。

こうした2つの前提に立って、事例Aを読み直して見ると、次のようになる。

馬が主人公の正式な妻ではない恋人であるとするなら、主人公が正妻を娶って帰路につくさいに、主人公が馬の機嫌をうかがうことは大いにありうる。なぜなら、馬は主人公が正妻を娶るための冒険のなかで惜しみなく主人公に協力してくれた恩人だからである。しかし、冒険が

終わったとき、次に起こることは、主人公と娶った正妻との故郷での結婚式であり、馬の立場からみると、故郷への帰還は主人公からの別離を意味するのである。むろん、馬が非正妻の隠喩であることからして、この別離は物理的な別離というよりも、心理的なものといえる。ただ、少なくとも、主人公の正式な結婚は、主人公と馬（恋人）の関係を、主人公の独身時代とは全く質の違うものに変えてしまうことは否めない。それゆえ、馬の心情は複雑なものとなる。

主人公はこうした馬の心情を理解して帰路を進むのである。具体的には、馬の足跡が○を描いたところに宿泊し、馬が長い線を描いたところでお昼を過ごす。なぜなら、馬の足跡が丸くなっているということは、馬の足跡が明確に残るほど馬がゆっくり進んでいることを表わしている。これは馬（恋人）が故郷に急ぎたくないことを表わしているので、主人公は馬の心を慰めるために、その場所で一泊するのである（一泊することを命じる）。それに対して、馬の足跡が線を描いているということは、逆に足跡が残らないくらい速く走っていることを表わしている。これは、馬が主人公のために家路を急いでくれていることを表わしているので、主人公は馬に感謝して少しだけ休憩しているわけなのである。主人公の馬が、主人公勇者が発発するさいには、「一か月の行程を一日に縮めて疾駆し、一日の行程を一時間に縮めて疾駆する」ことが多いことを考えれば、この帰路の馬の様子は対照的であるといえる。以上をまとめると、次の表1ようになる。

表1：“馬の足跡の痕跡”と“主人公の行為”の相関関係をつなぐ“馬の速度”と“馬の心情”の解釈

	馬の足跡の形	馬の速度	馬の心情	主人公の行為
1,2行目	○	遅い	帰りたくない	泊まる
3,4行目	線	比較的速い	主人公のために帰らないといけない	お昼だけ休憩する

表1で重要なことは、ゴシック体で表示した「馬の速度」と「馬の心情」は馬の隠喩をもとにした解釈である。この解釈があるからこそ、表1の両端の「馬の足跡の形」と「主人公の行為」とが意味あるものとして接合されることになるのである。

以上のように、馬の隠喩を想定すると、この謎めいた表現が理解可能な表現となる。それゆえ、先の2つの前提を受け入れることの妥当性が示されることになる。この仮説が受け入れられるものであるとすると、事例Aは非常に短い表現の中に勇者と馬の心の綾を見事に凝縮させた表現となっているといえる。

ところで、○や線が馬の蹄の痕跡であることを明示的に表現しなかったのは、なぜなのか。これには少なくとも語りの内在的理由と外在的理由が挙げられる。すなわち、物語内部では、主人公の帰途には冒険で手に入れた未来の正妻を連れていたため、こうした馬（恋人）への配慮は控えられねばならなかったことが推測されるのである。もう一つは物語外部の理由で、モンゴル文化における“ゆかしさ”（refinness, tastefulness, modesty）と理解される。なぜなら、モンゴル英雄叙事詩の聴衆には、大人だけでなく、子供もまた含まれていたことを考えると、

“恋人”というような存在を赤裸々に表現しなかったことは当然ありうることだからである。

1. 4. 本論で対象とする6つのヴァリエント

1. 3. で触れたように、事例Aには幾つかのヴァリエントが存在している。以下においては、他の5つの事例を順次示しておく。少し見ただけでも、これら6つの事例が互いにヴァリエント関係にあることは明瞭であろう。しかも、それらすべてが、モンゴル英雄叙事詩の結末部分、すなわち、主人公が冒険を終えて故郷に帰ろうとする途上で出現していることも付言しておきたい。これらの事例は筆者の手元にあったモンゴル英雄叙事詩のテキストのいくつかからざっと拾い集めたものであり、実際の事例はこれよりも多いであろうと推測される。

ヴァリエントを示す前に、対比のために、もう一度事例Aを示しておく、次のようになる。

事例A

Төгрөг зурсан газарт хоноод ирээт ○を描いたところに宿泊して来なさい。

Ут зурсан газарт үдлээд ирээт 線を描いたところでお昼を過ごして来なさい。

以下、事例Aのヴァリエントとして5例を示すことにしたい。この事例を考察の便宜のために事例B～事例Fとする。

事例B

Дугуй зурсан газар үдлээд○を描いたところでお昼を過ごして

Дөрвөлжин зурсан газар хоноод очоорой□を描いたところに泊まって行きなさい。

『ハルハ民間叙事詩』所収の「男の中の男ハイルト・ハル・フフル少年」(Нарантуяа 1991: 135-136)]

事例C

Гурвалжин зурсан газар үдлээд △を描いたところでお昼を過ごして

Дөрвөлжин зурсан газар хоноод харь гээд □を描いたところで一泊して帰りなさい、と言って

『ハルハ民間叙事詩』所収の「ヒリン・ガルブー・バートル」(Нарантуяа 1991: 93)]

事例D

Миний гурвалжин зурсан газар 私が△を描いたところで

Үдэлж яваарай お昼を過ごして行きなさい。

Дөрвөлжин зурсан газар□を描いたところに

Хонож яваарай 一泊して行きなさい。

『ハルハ民間叙事詩』所収の「14歳のアルタイ・スンベ少年」(Нарантуяа 1991: 68)]

事例 E

Утлам зурсанд минь 私が線を描いたところに

Хоноод ирцгээгэн みなで泊まってきなさい。

Төгрөг зурсанд минь 私が○を描いたところに

Үдлээд ирцгээгэн みなでお昼を過ごしてきなさい。

『オイラト英雄叙事詩』所収の「男の中の男ミメルゼフ」(Дамринжав 1997: 279)]

事例 F

Миний матгар зурсанд үдлээд 私が曲線を描いたところでお昼を過ごして

Гоо зурсанд минь залбираад 私が美しく描いたところで懇願して

『オイラト英雄叙事詩』所収の「8歳のナラン・ハーン・バートル」(Дамринжав 1997: 110)]

この6つの事例をよくみると、事例 F 以外の5つは主人公の会話で、かつ命令文として出現しているのに対して、事例 F のみ地の文で、かつ肯定文として現れている。すなわち、ヴァリエーションは大きく分けて2つの形式で現れていることになるが、6つの事例中の5つが前者であり、1つのみが後者に分類される。ここで注意が必要だと思われることは、どちらの形式がより原型(プロトタイプ)に近いかは決められないことである。つまり、事例が少ないからといって、事例 F が原型に近くないとはいきれないのである。

なぜなら、実際、馬の隠喩が“恋人”であることを考えると、どのように帰路を進むかは主人公勇者が判断して行動する性質のものであり、他者に命令する性質のものではないからである。むしろ、主人公勇者が一泊すれば家来たちも一泊することになるので、主人公勇者が家来たちに命令してもおかしくはないのであるが、主人公が一泊するかどうかを家来たちに命じるよりも、一泊することが主人公の行動として直接的に示されたほうが、馬と主人公との深い関係性を表わすのに適しているという考え方もできるからである。つまり、真の原型は次のような形でもありえることを排除できない。

もうひとつの仮の原型の形

Төгрөг зурсан газарт хоноод ○を描いたところで宿泊して

Ут зурсан газарт үдлээд 線を描いたところでお昼を過ごして

本論では、この2つの形式はどちらもありうると考え、議論を進めることにする。ここでは当面、事例 A をプロトタイプの表現として扱うことにしたい。“プロトタイプの表現”というのはやや表現として長いので、以下においては簡単に“仮の原型”と表現することにしたい。

2. 仮の原型との関係でみた他のヴァリエント

事例 A を仮の原型とするならば、他のヴァリエントはどう説明できるだろうか。すなわち、事例 A のような非明示的意味を読み取ることができるのかどうかという観点からまず眺め、その後で、仮の原型とどのような関係にあるのか、すなわち、なぜ異なるものとなってしまったのかを、事例を再度示しながら考察したい。考察のさいには、事例がある程度積み重なった時点で、少しずつ事例を仮の原型との関係で整理していくことにする。そして、最終的に6つの事例が相互にいかなる関係にあるかをまとめることにしたい。

2. 1. 事例 B の場合

事例 B を再度示すと、次のようになる。

Дугуй зурсан газар үдлээд○を描いたところでお昼を過ごして

Дөрвөлжин зурсан газар хоноод очоорой□を描いたところに泊まって行きなさい。

この事例 B を仮の原型である事例 A と強力にヴァリエント関係に関連付けている対句の動詞に注目して対比させると、表2のようになる。

表2 事例 A (仮の原型) と事例 B の比較—動詞の共通性に着目した場合—

	描かれた形と「宿泊する」の意の動詞	描かれた形と「昼に休憩する」の意の動詞
事例 A	○ と 宿泊	線 と 昼の休憩
事例 B	□ と 宿泊	○ と 昼の休憩

表2において興味深いのは、最初の語が変化しても、仮の原型を同様に踏襲していることである。すなわち、「宿泊すること」と「昼だけ休憩する」という対比は仮の原型と全く同様なのである。とはいえ、事例 A (仮の原型) と事例 B を比較すると、“描かれた形”と“主人公の行動”とは対応関係が異なっていることが観察される。これを明示するために、事例 A(仮の原型) と事例 B で共通している○に着目して整理した表3を見てほしい。

表3 事例 A(仮の原型) と事例 B の比較—○の共通性に着目した場合—

	“描かれた形”が○	“描かれた形”が○以外
事例 A	○ と 宿泊	線 と 昼の休憩
事例 B	○ と 昼の休憩	□ と 宿泊

事例 B では、事例 A (仮の原型) で肝心の、馬の蹄跡の○の場所で昼の休憩をとっていることが観察される。ここでは、明らかに非明示的な意味が読み取れない。この理由を考えてみると、“描かれた形”に着目してみると、それが理解される。事例 B では、Дугуй (○) と Дөрвөлжин (□) が選ばれており、それぞれの語が 1 行目と 2 行目の冒頭に置かれており、頭韻が踏まれているからである。さらに、ここで選ばれた語彙である○と□は図形的な対比としての面白さがあるといえる。この事例だけを見ると、Дөрвөлжин (□) という語は音的な観点と語彙的な観点の両方から選択された可能性があるといえる。

ここで指摘したいのは、表 3 の事例 B における○は、□と関連しているのであって、宿泊するか否かの問題とは無関係だということである。つまり、事例 B においては事例 A(仮の原型)と同様に、「○と宿泊」の組み合わせもありえたとし、事例 B の「□と宿泊」のほうは、「□と昼の休憩」の組み合わせもありえたとすることになる。ただし、この組み合わせは可能性としてありうるが、次に見る事例 C や事例 D においても事例 B と同様の「□と宿泊」の組み合わせが見られることを重視すると (表 4)、「□と宿泊」という組み合わせは定型句化している可能性があるといえる。この問題は後で取り上げる。

事例 B を見る限り、ここでは仮の原型における馬の隠喩が理解されなくなっていることは明らかである。隠喩の代わりに、頭韻を踏むことと、○と□の組み合わせといった図形的な対比に、語ることの興味が移されたように見える。

2. 2. 事例 C の場合

事例 C を再度示すと、次のようにある。

Гурвалжин зурсан газар үдлээд △を描いたところでお昼を過ごして
 Дөрвөлжин зурсан газар хоноод харь гээд □を描いたところに一泊して帰りなさい、と言って

一見するだけで、事例 C が仮の原型とヴァリエント関係にあることは、動詞の共通性に注目して対比させてみると、表 4 のように明らかである。

表 4 事例 A (仮の原型) と事例 C の比較—動詞の共通性に着目した場合—

	“描かれた形”と「宿泊する」の意の動詞	“描かれた形”と「昼に休憩する」の意の動詞
事例 A	○ と 宿泊	線 と 昼の休憩
事例 C	□ と 宿泊	△ と 昼の休憩

表 4 を見ると、事例 A (仮の原型) と事例 C の間では、“描かれた形”で共通するものは一つもない。すなわち、一方は「○と線」、他方は「□と△」がそれぞれ現れている。しかし、この

事例の「□と宿泊」の組み合わせは、前述のように、事例Bにおいて現れる組み合わせなので（表2・表3を参照）、「□と宿泊」という組み合わせは定型句化している可能性がうかがわれる。この問題は後で再び取り上げる。

以上の考察の限りにおいては、事例Cは原型における馬の隠喩が理解されなくなり、□と△の組み合わせといった図形的な対比に、語ることの興味が移されたのだと推測される。

ところで、事例A（仮の原型）、事例B、そして事例Cの相互関係は、次のように説明できる（表5）。まず、事例Cには、事例A（仮の原型）や事例Bと同じ「宿泊」と「昼の休憩」という動詞の組み合わせがあることを見ると、事例Aや事例Bと接続していることになる。次に、“描かれた形”の観点から見ると、事例Cは原型からは遠ざかっているが、事例Bと同じ「□と宿泊」の組み合わせがあるために事例Bとつながっているということになる。

表5 事例A(仮の原型)・事例B・事例Cとの間の関係性

観点	事例間の関係性
動詞の共通性	事例A-事例B-事例C
“描かれた形”	事例B-事例C

※表中の-は関連があることを示す。

2. 3. 事例Dの場合

事例Dを再度示すと、次のようになる。

Миний гурвалжин зурсан газар 私が△を描いたところで

Үдэлж яваарай お昼を過ごして行きなさい。

Дөрвөлжин зурсан газар□を描いたところに

Хонож яваарай 一泊して行きなさい。

この事例でまず指摘しておくべきことは、一見したところ、この句においては非明示的な内容は読み取れないように思われることである。なぜなら、仮の原型における馬の隠喩が機能していれば、「私が△を描いたところ」とか「私が□を描いたところ」というように、動作の主体を「私」（すなわち主人公）とはできないだろうからである。

とはいえ、主人公が馬に騎乗していることを考慮に入れると、馬の足跡を主人公の足跡と言っても間違いではないともいえる。とすると、馬の蹄の跡とは明示的に言ってなくても、隠喩が失われている事例とすることはできないことに注意する必要がある。

この事例Dが仮の原型とヴァリエント関係にあることは、動詞の共通性に注目して対比させてみると、表6のように明らかである。

表6 事例A(仮の原型)と事例Dの比較—動詞の共通性に着目した場合—

	描かれた形と「宿泊する」の意の動詞	描かれた形と「昼に休憩する」の意の動詞
事例A	○ と 宿泊	線 と 昼の休憩
事例D	□ と 宿泊	△ と 昼の休憩

表6のように整理すると、実は表4と同じであることが観察される。とはいえ、厳密に言えば、この事例Dは表4の事例Cと「ほとんど同じ」と言わなければならない。ここで「ほとんど」という理由は、両者は、句の順番と、馬の隠喩を一見否定している「私」という主体が明示されているか否か、という2点で違いがあるからである。これまで論じてきた事例の相互関係をまとめると、表7となる。

表7 2つの観点から見た事例A(仮の原型)・事例B・事例C・事例Dの関係性

観点	事例間の関係性
用いられた動詞2つの共通性	事例A—事例B—事例C—事例D
“描かれた形”と動詞との固定的組み合わせの共通性	事例B—事例C—事例D

※表中の—は関連があることを示す。

2. 4. 事例Eの場合

事例Eを再度記すと、次のようになる。

Утлам зурсанд минь 私が線を描いたところに

Хоноод ирцгээгэн みなで泊まってきなさい。

Төгрөг зурсанд минь 私が○を描いたところで

Үдлээд ирцгээгэн みなでお昼を過ごしてきなさい。

この事例でも、一見したところ、馬の隠喩が機能していれば、1行目や3行目に見える「私が線を描いたところ」とか「私が○を描いたところ」というように、動作の主体が「私」と明確に示されるはずはないように思われる。しかし、この事例においても事例Dで述べたことが当てはまる。すなわち、馬の足跡＝主人公の足跡という考え方である。それゆえ、これだけで隠喩が衰退しているとは言えない。

この事例Eと事例A(仮の原型)をヴァリエーション関係に関連付けている動詞の共通性に注目して対比させると、表8のようになる。

表8 事例A(仮の原型)と事例Eの比較—動詞の共通性に着目した場合—

	“描かれた形”と「宿泊する」の意の動詞	“描かれた形”と「昼に休憩する」の意の動詞
事例A	○ と 宿泊	線 と 昼の休憩
事例E	線 と 宿泊	○ と 昼の休憩

表8において、事例A(仮の原型)と事例Eにおける“描かれた形”に着目すると、○と線だけ現れており、しかも両事例において逆に対応していることが観察される。このことは、馬の隠喩が消失したため、「○と宿泊」の意味が理解されなくなったことを示している。とはいえ、事例B、事例C、および事例Dとは異なり、図形的な対比の面白さに、表現の興味が移っているわけではないことを示している。組み合わせ違いであれ、事例Eは原型との密接な関連があることは明らかである(表9)。

表9 諸観点から見た事例A(仮の原型)・事例B・事例C・事例D・事例Eの関係性

観点	事例間の関係性
用いられた動詞2つの共通性	事例A－事例B－事例C－事例D－事例E
“描かれた形”と動詞との固定的組み合わせの共通性	事例B－事例C－事例D
“描かれた形”と動詞とが互いに逆対応している点	事例A 事例E

※表中の－は関連があることを示す。

2. 5. 事例Fの場合

事例Fを再度示すと、次のようになる。

Миний матгар зурсанд үдлээд 私(私)が曲線を描いたところでお昼を過ごして

Гоо зурсанд минь залбираад 私(私)が美しく描いたところで懇願して

事例Fを見ると、どちらの行も「私」を描いた主体としている点で、一見、馬の隠喩が消失しているように思われる。しかし、これについては既に事例Dや事例Eで述べたことが該当する。すなわち、馬の足跡＝主人公の足跡である。それよりも事例Fで目立つのは、その他のヴァリエーションとは語彙の観点からみて大きく異なっていることである。

しかし、1行目の「曲線を描いたところ」と2行目の「美しく描いたところ」というのは、仮の原型の「線を描いたところ」と「○を描いたところ」にそれぞれ対応するという見方も可能であることを指摘したい。つまり、「美しく描いたところ」とは、馬の足跡を想定すると、馬の足跡が鮮明に観察される場所なので、「○を描いたところ」の類似表現と理解できるのである。これに対して、「曲線を描いたところ」は、馬の足跡が綺麗に残らなかったため「曲線」になったと考えると辻褄が合う。

このように理解すると、2行目の「懇願する」という動詞は他の事例では全く見られなかったものであるが、馬の隠喩を想定すれば、「美しく描いたところで懇願する」というのは、「馬がのろのろと歩いているところにおいては恋人にお願いをして歩を進めてもらう」という意味に理解することができる。

それゆえ、事例Fは、一見、事例A(仮の原型)から遠いように見えながら、実際には類似表

現になっているといえる。以上述べたことをまとめると、表10のようになる。

表10 事例A(仮の原型)と事例Fの比較

	“描かれた形”と「宿泊する」の意の動詞	“描かれた形”と「昼に休憩する」の意の動詞
事例A	○ と 宿泊	線 と 昼の休憩
事例E	美しく描いたところ と 懇願すること	曲線 と 昼の休憩

事例Fをその他の事例との関連で示すと、次の表11のようになる。これは、表9に“描かれた形”と動詞とが意味的に対応している点という項目を追加したものである。

表11 諸観点から見た6つの事例相互の関係性

観点	事例間の関係性
用いられた動詞2つの共通性	事例A－事例B－事例C－事例D－事例E
“描かれた形”と動詞の固定的組み合わせの共通性	事例B－事例C－事例D
“描かれた形”と動詞とが互いに逆対応している点	事例A ー事例E
“描かれた形”と動詞とが意味的に対応している点	事例A ー事例F

※表中の－は関連があることを示す。

以上、事例B～事例Fまでの5つの事例を事例A(仮の原型)との関係で考察してみた。最終的にすべての事例を含めた表11をみると、詳細なレベルにおいて事例が互いにどのように関連しているのかを改めて見て取ることができる。

3. 馬の隠喩論とは異なる観点からの当該表現の考察

3. 1. 当該表現に及ぼした謎々“昼は△、夜は□”

以上、2. においては、事例5つを事例A(仮の原型)との関係で考察したが、そこにおいて保留していた問題をここでは取り上げることにはしたい。それは、「□と宿泊」という組み合わせに定型性があるのではないかという点である。具体的にいえば、表11における“描かれた形”と動詞の固定的な組み合わせの共通性の欄を見てほしい。そこにおいては事例B、事例C、事例Dの3例に「□と宿泊」という組み合わせが存在している。つまり、「□と宿泊」の組み合わせは固定化されている可能性がある。

なぜこのような固定化が起こったのかの背景を考察する場合、モンゴルにおけるよく知られた謎々である“昼は△、夜は□”(原語では *өдөр гурваөжин шөнө дөрвөржин*) との関連が疑われる(注3)。この謎々における後半の“夜は□”というのが3つの事例における「□と宿泊」に呼応しているのである。とくに、謎々の「□は夜」、「△は昼」という組み合わせは、「□と宿泊」という組み合わせの見られる3つの事例のうち2つー事例Cと事例Dーに「□と宿泊」と「△と昼の休憩」が現れている。この事実を見ると、謎々の影響を無視することはできないように思われる。

ちなみに、この謎々の答えは移動式天幕の天井にある煙穴を覆う四角のフェルトである。モンゴル語では“ウルフ opx”と呼ばれている。夜間はこのフェルトは天窓を覆っているので四角い形をしているが、日中は天窓を開けているので折りたたまれて三角の形になっている。この謎々の影響があったとすると、前述したような、事例 C を事例 A (仮の原型) における馬の隠喩が理解されなくなり、□と△の組み合わせといった図形的な対比に、語ることの興味が移されたのだと単純に見なすことはできなくなる。

とはいえ、謎々は昼夜で天窓のフェルトの形が異なることに言及しているのであって、このフェルトは同じ天幕にあるものである。その観点から見れば、宿泊したり昼の休憩をとったりする場所の区別を指示した英雄叙事詩の印の区別とは相容れないといえる。この問題を解く手がかりは、謎々と同じ組み合わせを持つ事例 C や事例 D ではなく、同じく「□と宿泊」の組み合わせをもつが、もうひとつの句が「△と昼の休憩」ではなく「○と昼の休憩」となっている事例 E にあるように思われる。なぜなら、事例 B に現れる図形の組み合わせが□と○であることから、謎々の影響を全面的に受けたとは考えにくいからである。とはいえ、この事例 B において「□と宿泊」が厳然としてあることは、謎々の影響を強く感じさせる。

それゆえ、事例 B は、伝統的馬の隠喩が衰退して、当該表現がこの謎々と混線してしまったのではないかという解釈が可能であろう。そのさいに、原型の重点は「線を描いたところで昼の休憩を取る」というよりも「○を描いたところで泊まる」のほうにあったと推測されるので、○という図形が残ったのだと考えられる。

3. 2. 謎々の影響の限定性

ここで強調しておくべきだと思われるのは、謎々の影響が叙事詩の当該表現に多大な影響を与えたとしても全面的なものではなかったと考えられることである。その理由は、ひとつには、事例 E や事例 F といった△や□の図形が全く表現の中に入っていないことが観察されるからである。こうした事例は明らかに謎々「昼は△、夜は□」の影響から無関係であったことを示している。この観点からみると、6例のうち3例には謎々の影響が全く見られない。

第2に、謎々の影響の入っていない3例のうち、事例 A と事例 E は、印の種類として○と線との組み合わせが見られ、△と□ではなく、○と線の組み合わせが固定的である可能性も示唆している。残る事例 F の存在は、前述のように一見事例 A とはかけ離れているものの、実際には類似表現といえるので、○と線の組み合わせの変形ということができる。すなわち、事例 F は、第2の理由で挙げた、○と線という組み合わせが固定的である可能性を補強する事例となっているといえる。

謎々の影響という観点から考察をまとめると、次のようになる(表12)。“昼は△、夜は□”という謎々は、馬の隠喩が衰退したときに、叙事詩の“○を描いたところで泊まり、線を描いたところでお昼の休憩をする”という事例 A(仮の原型)に「ある程度」影響を与えたといえる。

表 12 当該表現に及ぼした謎々の影響の有無と程度

	描かれた図と対応する事柄	謎々の影響の有無とその程度	該当する事例
①	△に昼の事柄、□に夜の事柄がそれぞれ対応する事例	完全に有り	事例 C・事例 D
②	□に夜の事柄という対応関係のみある事例	中途半端に有り	事例 B
③	“描かれた形”として△も□も現れない事例	無し	事例 A・事例 E・事例 F

「ある程度」というのは、当該謎々が影響を与えたということであれば、“描かれる図”としては△と□の組み合わせのみであり、また対応関係も確実に△には昼と関連する事柄、□には夜と関連する事柄になっていくべきであるが、実際にこの条件が当てはまるのは事例 C と事例 D しかないからである（表 12 の①）。

とはいえ、△の代わりに○が登場して昼と関連する事柄が対応し、且つ、□に夜と関連する事柄が対応しているような事例 B が存在していることをみると、中途半端に謎々の影響を受けた事例が存在している（表 12 の②）。それゆえ、当該表現に謎々が「ある程度」影響を及ぼしたことは否めない。ただ、それでもなお、○と線しか登場しない事例 A（仮の原型）や事例 E、そして曲線や美しく描いたところといった表現がなされている事例 F は、謎々の影響から説明できない事例となっている（表 12 の③）。言い換えれば、本論で取り上げた 6 つの事例のうちこの謎々の影響を全く受けていない事例として事例 A（仮の原型）、事例 E、そして事例 F の 3 例があることは強調すべき点である。

3. 3. 隠喩の衰退からみた諸事例の検討

次に、隠喩の衰退という観点から事例を整理してみよう（表 13）。以上で考察した対象は、言うまでもないことであるが、叙事詩が採録された時点で伝承されていた語りに現れていた形態である。本論における採用した 2 つの仮説から眺めるならば、叙事詩が採録されるという時点における伝承においては、①隠喩がかなり維持されている様態、②隠喩が衰退しているもの、③隠喩がなくなってしまったもの、の 3 つの様相を認めることができるということになる。

表 13 隠喩の衰退と 6 事例の対応関係

	隠喩の維持状態	謎々の影響との関係で説明可能なもの	謎々との関係で説明できないもの
①	隠喩がかなり維持されている様態		事例 A・事例 F
②	隠喩が衰退しているもの	事例 B	事例 E
③	隠喩がなくなってしまったもの	事例 C・事例 D	

※ 表中のゴシック体は表 12 のカテゴリと違いがある事例

具体的にいうと、隠喩がかなり維持されている様態とは、謎々の影響を受けていない事例で、事例 A（仮の原型で、曲線と○の組み合わせ）と事例 F（“曲線と美しく描いたところ”）が該当する（表 13 の①）。事例 F を①にカテゴリ化しているが、事例 A と比べると、描か

れた図形を馬の足跡ではなく、主人公が描いた図形と明示的に表現されている点で、隠喩は後退しているように見える。しかし、前述したように、この馬に主人公が乗っているとすれば、馬の足跡＝主人公の足跡と言えるので、類似表現として扱えるのである。

これに対して、隠喩が衰退しているものというのは、謎々の影響といえる□と宿泊の組み合わせが残っているような事例 B がそれに該当する（表 13 の②）。最後に、隠喩がなくなってしまったものというのは、完全に謎々の影響下にある事例である事例 C や事例 D が該当する（どちらも△に昼の事柄、□に夜の事柄がそれぞれ対応する）（表 13 の③）。

「隠喩が衰退しているもの」の 카테고리には、加えて事例 E が入るだろう（表 13 の②）。ただしこの事例 E の場合、謎々の影響の有無とは別個の説明が要る。事例 E は謎々との対比の考察では事例 A（仮の原型）や事例 F と同じカテゴリーに入るが（表 12 の③）、「描かれた図形」と「宿泊の有無」とが事例 A（仮の原型）の場合と逆に対応しているの、そこにおいては明らかに隠喩が失われているといえる。とはいえ、事例 E は原型に通じる事例 A（仮の原型）と逆対応しており、完全に隠喩が消失してしまった状態ともいえない。この 2 点をふまえて、事例 E を「隠喩が衰退しているもの」のカテゴリーに入れておく。

4. 結論と今後の課題

4. 1. 結論

本論の考察の要点をまとめると、次のようになる。

まず、本論で検討した当該表現が非常に謎めいた句であることを指摘した。重要なので繰り返すと、当該表現は一般に、主人公が、○を描いたところに宿泊するように、また、線を描いたところで休憩するように、「家来」に命じている場面として理解されている。ただし、実は実際のテキストを見ると、主人公が誰に言っているのかは曖昧である。誰に対してというばかりでなく、そもそも何を意図しているのかが不明である。モンゴルの慣習においても、何らかの図形を描いて宿泊する場所や休憩する場所を決めることは伝統的にも、現在においても見られないので、慣習的な影響も想定しがたい。

本論では、この謎めいた表現を解き明かすためには、2 つの仮説を受け入れることが必要であることを最初に述べた。その 2 つの仮説とは、① 馬は非明示的には動物ではなく、主人公の非正妻を意味していること、②ここで言及されている○や線といった図形が馬の足跡の形を示したものであり、その形は馬の心情を表わした表現であること、である。この 2 つの前提を受け入れて考えると、当該表現のプロトタイプ的表現（仮の原型）は、事例 A の Төгрөг зурсан газарт хоноод ирээт（○を描いたところに宿泊して来なさい）、Ут зурсан газарт үдлээд ирээт（線を描いたところでお昼を過ごして来なさい）であることを示した。その上で、この表現が非明示的にどのように読み解かれるのかを示し、その妥当性を説明した。

重要な箇所であるので、もう一度繰り返すと、次のようになる。すなわち、馬が主人公の正式な妻ではない恋人であるとするなら、主人公が正妻を娶って帰路につくさいに、主人公が馬

の機嫌をうかがうことは大いにありうる。なぜなら、馬は主人公が正妻を娶るための冒険のなかにおいて惜しみなく主人公に協力してくれた恩人だからである。しかし、冒険の終わったとき、次に起こることは、主人公と娶った正妻との故郷での結婚式であり、馬の立場からみると、故郷への帰還は主人公からの別離を意味する。それゆえ、馬の心情は複雑なものとなる。主人公はこうした馬の心情を理解して帰路を進むのである。

具体的には、馬の足跡が○を描いたところに宿泊し、馬が長い線を描いたところでお昼を過ごす。なぜなら、馬の足跡が丸くなっているということは、馬の足跡が明確に残るほど馬がゆっくり進んでいることを表わしている。これは馬（恋人）が故郷に急ぎたくないことを表わしているのだから、主人公は馬の心を慰めるために、その場所で一泊するのである（一泊することを命じる）。それに対して、馬の足跡が線を描いているということは、逆に足跡が残らないくらい速く走っていることを表わしている。これは、馬が主人公のために家路を急いでくれていることを表わしているのだから、主人公は馬に感謝して少しだけ休憩しているわけなのである。

実は、事例 A（仮の原型）にはヴァリエントが幾つかあるが、事例 F 以外の 4 つの事例では、以上のような非明示的意味は読み取れない。つまり、事例 A と事例 F 以外においては、すでに馬の隠喩が衰退していると言わざるをえない。興味深いことは、事例 F は明示的には事例 A とほぼ無関係に見えながら、非明示的には近似していることである。ここにおいては、図形を描いたのが馬でなく主人公と明示している点で、一見、馬の隠喩が失われているように見えてつても、主人公が馬に乗っているのであれば、馬の足跡はそのまま主人公の足跡ともいえるからである。

隠喩が保持された事例である事例 A や事例 F 以外のヴァリエントにおいては非明示的な読みはできないことがわかったので、これらのヴァリエントは隠喩の衰退過程において生じたものと考えられる。そのプロセスにおいては、図形的な対比や、頭韻を踏むといった言葉遊びといった、形式上の面白さに語られる興味が移動していったといえる。とくに、隠喩の衰退において拍車をかけたのは、“昼は△、夜は□”という謎々のフレーズであると考えられる。実際、本論で取り上げた事例 A（仮の原型）を含む 6 つのヴァリエントのうち半数にこのフレーズの影響が認められた。

しかし、謎々が当該諸表現に与えた影響を考える場合、注意しなければならないことがある。それは、隠喩が保持されている事例 A（仮の原型）や事例 F とその謎々とは本来何も関係ないことである。つまり、事例 A（仮の原型）における隠喩が衰退するにつれ、外形的に似ているだけの謎々の影響を受けるようになったにすぎない。とはいえ、隠喩の衰退という状態を考慮に入れ、また、この謎々のポピュラリティを考えれば、今後、こうした謎々の影響を受けた事例の数は増えていくものと予想される。

4. 2. 今後の課題ージャングル叙事詩における当該表現の存在の意味ー

事例Aがプロトタイプの表現（仮の原型）であったという本論の仮説に基づくならば、この事例Aが出現していた英雄叙事詩であるジャングル英雄叙事詩について付言しておく必要があるように思われる。そこで、馬＝恋人であるなら、主人公勇者の婚姻譚において出現する可能性が高いと考え、ジャングルの勇者たちの婚姻譚で当該表現のヴァリエントの有無を調べてみた。すると、当該表現はジャングル叙事詩のカルムイクの26章本や新疆で採集された72章本においては唯一『ブフ・ムングン・シグシルゲ』の叙事詩にのみ現れていることが確認できた（Gereltü, T. Namjil, Sodnamrabtan 1988:51）。

つまり、ジャングル叙事詩群の中では当該表現は非常に稀なものということになる。この理由については、以前に別の論文で触れたことがある（藤井 2002:264-266）。そこにおいては、主人公勇者が複数の女性と結婚をするというテーマをもつ英雄叙事詩においては、恋人との対比が意味をなさないで、そうしたテーマにおいては馬の隠喩は後退せざるをえないことを指摘した。

ジャングル叙事詩の場合、ジャングルの盟友であるホンゴルについての婚姻譚においては、ホンゴルは最初の結婚に失敗しており、二番目の女性と結婚していることが観察される。それでも、ホンゴルがその二番目の女性と結婚するさいに、馬はホンゴルを叱咤激励しており、馬が擬人化されている点で、馬の隠喩は完全には消滅していないといえる。ジャングル叙事詩だけでなく、ゲセル英雄叙事詩においても、ゲセルは複数の女性を妻にするので、そこにおいても馬の隠喩は後退していることが観察される（藤井 2002:262-264）。とはいえ、ホンゴルの婚姻譚と同じように、ゲセルの正妻を娶るさいには、馬がゲセルを叱咤激励しており、馬の隠喩は後退しながらも完全に消えさってはいないといえる。プレヴ氏の語った「ブフ・ムングン・シグシルゲの婚姻譚」における当該表現は、こうした馬の隠喩の痕跡のひとつなのではないかと筆者は考える。

注

1) 本論は2017年12月2日に行われた首届《江格尔》研究国際学术讨会（於内蒙古大学蒙古学学院）における筆者の研究発表に加筆・修正を加えたものである。

2) 当該論文は（藤井 2003）の第1章として再録されている。

3) 本論で論じている表現が当該謎々と関連しているのではないかというのは、注1)の学会において北京大学の陳冈龙氏がコメントされたものである。この場を借りて氏に謝意を示しておきたい。

引用文献

<トド文字文献>

Эх материал 2 (出版年不明) Jangyar-in eke material 2 (Qariučalaytai nairuuluyči: T. Badma, Nairuuluyči: T. Jamca) 新疆人民出版社

<ウイグル式蒙古語文献>

Damrinjab(Baljei-yin Damrinjab čuyayulun emkidgebe) (2006) Qan qrangyui- Oirad-un bayaturliy tuulis-un tekst kiged üges-ün tailburi-, Ündüsüten-ü keblel-ün qoriy-a.

Gereltü, T. Namjil(bayulγaju tailburilaba), Sodnamrabtan(kinaba) (1988) Jangyar 1, Öbör Mongyol-un arad-un keblel-ün qoriy-a.

<キリル文字文献>

Дамринжав, Б. (1997) Ойрдын баатарлаг туульс, Цуглуулж эмхтгэсэн: Дамринжав, Б., Ариутган шүүгч: Д. Цэрэнсодном, Монгол улсын шинжлэх ухааны академийн хэл зохиолын хүрээлэн, Улаанбаатар.

Нарантуяа, Р. (1991) Халх ардын туульс (Эмхтгэгч: Нарантуяа, Р., Редактор: Сампилдэндэв, Х.), Улсын хэвлэлийн газар, Улаанбаатар.

<日本語文献>

藤井麻湖 (1998) 「隠されたセクシュアリティー：馬頭琴をめぐる伝説から」 『季刊民族学』 85号, pp.66-71

藤井麻湖 (2001) 『伝承と喪失と構造分析の行方—モンゴル英雄叙事詩の隠された主人公』 日本エディタースクール出版部, pp.290-296

藤井麻湖 (2002) 「モンゴル英雄叙事詩における“隠喩の馬”と“現実の馬”」 『北アジアにおける人と動物のあいだ』 東方書店, pp.243-283

藤井麻湖 (2003) 「第2章 エンヘ・ボロト王」 『モンゴル英雄叙事詩の構造分析』 風響社, pp.39-78

藤井麻湖 (2005) 「中国青海省土族の民話『黒馬』における隠された物語」 『ユーラシア草原からのメッセージ—遊牧研究の最前線』 平凡社, pp.215-235

藤井麻湖 (2006) 「謎々における馬—モンゴル英雄叙事詩の隠喩研究の補完として」 『言語文化学会論集』 27号, pp.133-143